

のでしばらく家事を手伝っていただきながら時を過ごしたこともありました。

その後再びお会いしたのは、当時始まったばかりの熊本県果実農業協同組合連合会の事務所でした。事務所は熊本総合卸売市場の片隅にあり狭い所でした。私は組合長に用件があり出向いたのですが、畠田さんはそこで働いていました。仕事があつて良かったなあという気持ちでした。

組合長は中学の私らの先輩であり、当時みかん生産の一大産地作りに意欲を燃していた三角農協の組合長の岩崎守氏で、岩崎氏と畠田氏が熊本県果実連の開拓者であり最高の功労者であると信じます。熊本県果実連はその後発展に発展を遂げ、平成七年度は取扱高は年百八十億円、またその配下には年商売上二百億余のジュース加工場などがあります。

畠田氏は自らが育て上げた熊本県果実連の職員としての最高峰である参事の職を最後に定年退職し、ただちに全抑協熊本県連合会の事務局長として今日に至っております。

温厚誠実な方であります。

思うに、氏が今も忘れることのできないであろうと思うのは、終戦になったことも知らず吉林の山中をさまよううちにソ連兵と遭遇し、一度は死を覚悟したものの、叔父の犠牲によって命拾いをしたことでしょう。叔父様の御冥福を祈りたい。

ソ連抑留中は他のラーゲルよりはいくらか恵まれていたようです。

(熊本県 高瀬 潤吉)

平和の礎に寄せて

熊本県 本田 正行

私は大正十三年九月二十五日、熊本県八代郡吉野村(現、竜北町)本山で、本田又雄の次男として生まれ、昭和十二年吉野尋常小学校を卒業後、店の手伝いから丁稚奉公しているとき、十七年九月徴用令により、佐世保海軍軍需部海上運転手(海軍傭人待遇)として海

上作業に従事。一年くらいして、以後、満州の部隊に入隊まで事務所に勤務、その間十九年徴兵検査を受け、第一乙種となり、入隊通知を待っていた。

昭和二十年二月十五日、満州第七〇〇〇部隊への入隊通知書を受け帰郷、県兵事課よりの通達により、十四日正午熊本駅前集合、点呼後博多駅前旅館に宿泊、十五日東公園にて満州よりの引率者により点呼後、西日本新聞社にて身体検査を受ける。翌十六日は御供所小学校の校庭にて軍服、外套、下着、靴下並びに地下足袋が支給され、着ていた私服は小包紙に包装して、自宅あての荷札をつけて差し出した。

十七日は旅館を早朝出発、博多港へと向かう。接岸していた昭慶丸に乗り込み釜山へ向け出航、途中敵潜対策の訓練あるも無事釜山に上陸、劇場のような所に集合して夕食後、汽車に乗る。大邱で朝食受け取りの当番となる。龍山より進路を東へとる。途中、雪の新北星駅で一同下車、体操をする。「短時間とはいえ、初めて体験する零下の地、地下足袋を通して痛みを感じた。任地の寒さはもっと厳しいと言われて、気を引き

締めなければと思った。汽車は時々止まるくらいで走り続けている。二十三日夜分にめざす鷄寧に到着。

直ちに近くの兵舎へ向かう。近くのわか造りの兵舎（これは関特演兵舎と称する半地下式兵舎）に引率された。中は暖かく暖房して我々を迎えてくれた古兵殿に感謝して落ち着く。ここに中隊配属が決まるまで博多編成で過ごす。毎日週番士官がやって来て「今日も一日大きな声を出したか」と尋ねられ、声が小さいと何回もやられた。

二十六日、営庭に集合して、中隊配属指名があり、私は一中隊になった。昨日まで一緒にいた友とも別れ、新しい友と知り合う。部隊長殿より「お前たちは今日から赤ん坊になって奉公に邁進せよ」うんぬんの訓示あり、その晩は赤飯が出た。聞く所によると、軍隊で赤飯食ったら、お返しにビンタは覚悟せねばならぬとか。翌日から各中隊とも、初年兵教育係下士官が起居を共にすることになり緊張した日々が続く。

三月十日、陸軍記念日で休日となり、軍人会館で映画見物に引率され、人気俳優・阪妻の「魔像」を見物

した。翌十一日には鷄西の兵器庫に行き九九式小銃が渡された。 그리스に包まれているので帰宮後掃除した。これが終戦まで各人の持銃となる。翌日、我々一中隊は、平陽の駐屯地に移動することになり、銃をかついで行軍した。本隊の主力は伐採作業、道路作業等に出動していて、指揮班ほかわずかの人たちがおられた。ここで基礎訓練やら鞍馬訓練を受けた。

雪が溶け始めた四月六日、林口へ移駐することになり、三泊四日の鞍馬輸送訓練といって凍った川を渡河中、氷のヒビ割れが音をたててやって来る。急いで渡った途端、氷が割れて水に浮き出したときは、ヒヤ汗をかいた。滴道、蘭嶺、麻山と進み、林口の兵舎に到着。ここはレンガ造りの本格兵舎で設備もよい。兵営生活にも大分慣れてきたし、気候も良くなって、赤い夕陽がきれいに見える。原野では色とりどりの花が咲き出して、演習も楽しくなった。

六月中旬になって、樺林へ移駐命令が出る。装備その他を積載して、二度往復した。龍爪、楚山、七星、仙洞と続き、輸送も楽しかった。樺林は牡丹江の一つ

先で丘陵を隔てていた。

八月一日第一期の検閲が済み、二日一等兵進級の報告をして、各人は内務班に配属された。私は下士候を命ぜられ、八月十五日出発を内示され、それまで勉強するように言われた。大方の主力は道路作業に行ったので、幹候、下士候の者が当番担当で忙しかった。九日の日曜日は、本部下士官引率で、牡丹江に「マレーの虎」の映画見物となり、初めての外出日でもあったので楽しみにしていた。

午前三時ごろ遠くでラッパの音がする。耳をすましていると近くでも鳴り出し、週番下士官が大声で「非常呼集」と叫んでいる。完全軍装で宮庭に集合整列していると、週番士官より「今朝ソ連軍が越境侵入した。別命あるまで待機せよ」とのこと。急いで朝食を済ませていると、「元気な者は全員弾薬輸送に出動」することになり、鞍馬の用意をする。準備完了次第各中隊とも、仙洞へ向け出発する。

宮門では道路作業所から駆け付けて来られた中隊長が激励される。指揮は所沢小隊長がとって仙洞へ行っ

た。夕方、仙洞の河原で夕食を済ませると、ただいまより丘の上にある弾薬庫より仙洞駅までの弾薬輸送の命令が出たので全員出動となり、丘の地下壕より弾薬箱を積み込み、駅の間を往復する。十日、十一日と徹夜の作業だ。食事も人馬共に短時間で済ませながら、半ば眠りながら馬に挽かれての往復であった。

十一日正午過ぎ貨車積みが終わり、五家林へ出発、夕方村はずれの畑に一時待機した。夕食後薄暮になってから樺林へ向かって出発した。今朝、仙洞駅で伝騎が「後三時間で敵戦車が到着する」と言って走り去ったのが気にかかる。そのうち雨が降り出して、ずぶ濡れになって、暗闇の中を馬を頼りに進んだ。ただ前の車について行くしかなく、途中で他中隊で馬ごと車両が道路脇に落ちたといつて大騒ぎしていた。夜明けになって我々は樺林兵舎の川向こうの道を進んでいた。安堵の気持ちで進行する。

やっとの思いで兵舎に着いた。先着の道路作業隊の戦友は、皆新品の服を着ている。早速我々も被服庫に行つて新品に着替えてサッパリした。その日、編成替

えがあり、私は歩兵小隊に編入された。出発命令待ちだったが、結局兵舎泊りとなる。

十三日早朝、牡丹江へ転進のため大隊全員宮庭に整列して、本部、一中隊と建制順に出発した。私は早川君と二人で尖兵を命ぜられ、出発、一キロくらい進んだところで向こう側の丘の上から戦車が数台下って来るのが見える。敵か味方か分からない。街を過ぎ第一の峠付近に差し掛かったとき、「敵戦車接近急げ」の命令、後から本部の木下副官に急げ急げと追い立てられる。馬の首がこちらより先になる。走りながら後退する。後から「シュルシュル」と音をたてて敵弾だ。幸い前方で道は左折していて、湿地帯に落下し空高く泥が上る。今まで整然と行進していた列が、にわかに乱れだす。速射砲隊が配置につく。歩兵はタコツポに足場を作り配置につく。車両は邪魔だ早く行けと言うがままならぬ。小川を渡って次の峠道を息切れしそうになって走った。

頂上付近で参謀が車から降りて双眼鏡を手に前方を見ておられた。そのとき、横にいた戦友の小野君が

「叔父さん」と声をかけたら、その参謀は「おー、お前か、早く牡丹江の橋を渡れ」と言われた。私は小野君に、走りながら「お前の叔父さんか」と聞くと、「うん、母の弟の柏田大佐だ」と言う。五軍の高級参謀だと後で知った。とにかく言われた通りの橋をわたっていると、さっきの山頂付近で待ち構えていた野砲、野戦重砲の激しい砲声が聞こえてきた。いよいよ来たな、と思いつながら橋を渡ったら「徒歩小隊止まれ」の声、ここで我々は対戦車用破甲爆雷(三連結)が渡され、円匙でタコツボを掘りだす。急遽掘ったタコツボで待機していると、山頂の砲声も止み、一応撃退したらしい。後で分かったことだが、その当時の状況は、本部、一中隊は車両共到着、二、三中隊は大半が車両を道路に対戦車妨害用に放置、人馬だけが到着。

四中隊は街の前後に展開していて敵戦車に分断され、翌日になってやっと集結合流した。中には敵戦車から落ちてウロウロしていて狙撃兵を高梁畑の中から撃つて命中したので、間隙を縫って畑に引き入れ、自動小銃を奪った勇士もいた。五中隊は宮門付近を進行中敵

戦車の砲弾で衛兵詰所がふっ飛んだそうで、五中隊は反対側の丘に向かって反転し、翌日遠回りして追従した。六中隊は宮庭に整列中だったので、すぐ裏門方面に反転し、翌日合流した。

鞍馬部隊は一列縦隊のため大隊ともなればその行進は何キロと長い列となる。敵戦車からすれば向こう側の丘の上から丘の下の宮庭は箱庭でも見る鳥瞰図同様であることは、我々が演習に行つて体験済み。さぞや薄ら笑いしながら下りて来たことだろう。中に川を含む湿原があるので直接は来ることができず、道は遠回りになっていたのが幸いであった。

午後は敵爆撃機が牡丹江駅付近を爆撃して宣伝ピラまで投下して行つた。まだ橋はそのままにしてあった。十四日は夜半に起こされ四道迷子の貨物廠に米を積み込みに行つた。徒歩小隊は一足先に出発、雨の中を黙々と歩く。どういふわけか、そのころは昼は晴れて夜は必ず雨が降った。これは二十日くらいまで続いた。早朝四道迷子に着いてびっくりした。前方五キロくらい先の磨刀石駅の付近は打ち上げ花火の最後のようにだっ

た。色とりどりの着色弾、それに落下傘の照明弾がキラキラ光る。光と音の大スペクタクルだ。その下を友軍が前線へ向かって走って行く。お互いにそのときは国のために必死の思いだ。輓馬隊は米を積んで急いで去って行く。我々も後を追ったが、乗車馭法で走り去るのには勝てない。伊藤班長と早川君の三人で行動することに、途中で前線から下って来る戦友のために乾パンと缶詰が溝に大缶を開封して置いてあるので朝食にありついた。道路の往来は激しく、工兵隊が地雷原に入るなど叫んでいた。愛河まで来たら、気持ちも落ち着いてきた。でも磨刀石の激戦の砲火は頭にこびりついて離れない。

十五日は朝から爆撃や機銃掃射が続いた。私は防空監視員を命ぜられ、監視塔は隠蔽物はなく、やけくそで小銃で立ち向かったものだ。夕方になって酒が配られ、ただ今より特攻攻撃のため前線に出陣するという。軍司令部前の畑付近に展開していると、「前線の歩兵部隊が退却させたので、解除になって牡丹江に転進する」との命令、掖河を出て牡丹江を過ぎ、どこへ行く

のか雨の闇夜を前進者の後ろからついて行った。夜明け前ごろから対岸の飛行場付近でタンクが爆破されてその度に道路が明るくなる。朝方少し明るくなって気がついたら草原の道を歩いていた。時々トラックが急いで追い抜いて行く。乾パンをかじりながら行軍は続く。九時ころになって敵機のお百度参りが始まった。

十六日、我々は終日拉古と海林の間の丘の草原で、波状的に機銃掃射や爆撃に見舞われた。夕方、海林に到着してみると、何人かの戦死者の名前を聞いた。朝から飯を食っていないので、米をもらって飯盒炊さん中に出発命令、半煮えで食えないが仕方がない。そのうち、夕方になって追い打ち的にまた敵機来襲、赤い光線が民家の屋根に飛んで行く。

爆撃が終わって夕方暗くなると雨がまた降り出した。暗夜に戦友を探していると、馬車に三人ずつ乗っている。そのうち予備馬を引いている人にその馬を貸してもらった。横道河子で必ず返しに来いとのこと。約束して、馬に乗るといっても輓馬具が付いている。馬具の腹帯をゆるめて前にやってその後に乗ることにした。

乗るのに苦勞してやっと乗って進む。そのうち疲れが出たのか眠ってしまう。気が付くと暗夜に馬は草を食っていた。方角はわからぬが、とにかく馬を進めると一団の小隊に追いつき、彼らの方向に向かって進み、明け方や横道河子の入口に着いた。きれいな小川を見付けたので馬にも休憩させた。馬を挽いて部隊を探している中に空襲に遭い、馬も驚いて綱を切って逃げてしまった。後は一人になって、乾パンも馬に積んでいたの、食料を探しながら山中をウロウロしていた。

部隊は夕方に到着した。こちらが先に来ていたのだ。十七日夕方、夕食後ハルビンに向かって出発したが、途中から引き返し元の所で待機することになった。

終戦、武装解除

八月十八日未明、宮脇小隊長が命令受領から帰ってきて終戦を告げた。停戦協定成立と言うが、非公式には敗戦だろうと言われた。一時茫然となったが、とにかくみんなと行動を共にすることを約した。空襲もなから堂々と炊事当番は煙を出してよいと、やけくそか、川端から煙が上り始めた。五軍の司令部も当地に

あるので別命あるまで待機せよとのこと。私は伊藤班長、早川君と三人で駅まで落伍兵誘導のため行くことになる。夜明け前で着剣して駅まで来ると、五軍の参謀という人が「武器はここにおけ」と言われた。班長が部隊に帰って指示を受けると言うのと、「何を言うか、俺たちは伝家の宝刀も捨てたんだ、お前たちの官給品ではないか、置いて行け」と言われ、帯革だけしめて帰って来た。

そこで初めて見るソ連兵が馬やトラックに乗ってやって来る。帰って見ると部隊でも武器を集めていた。その後、道脇にいとソ連と争いになるかもしれないというので、向かい側の山の中に移動して別命を待った。二日くらいして雨の中を下山して牡丹江に移動することになり行軍が始まる。二日夕方、拉古の旧病馬廠に収容された。ここで千名単位の大隊に編成されて、二十日ばかり滞在する。臨時野戦病院で働く看護婦たちも断髪して軍服姿である。つらかったと思う。

いよいよソ連へ

拉古編成第十二大隊として、大隊長小林五一大尉以

下千名は、九月十一日朝、ダモイのためウラジオストックに向け行進した。汽車は病人などで混雑しているので、元気な者は徒歩にてウラジオストックに行くとのこと。徒歩でも小走りでも内地に帰ることならと、一同張り切って出発した。

初日は牡丹江の官舎跡、十二日は代馬溝の道端だったが、途中磨刀石の駅付近の激戦の跡には驚いた。四道迷子からの一月前見た時を上回る光景だ。お国のために戦死した友軍の英霊に黙祷をささげつつ無言の行進が続く。戦車のキャタピラや両軍の鉄兜が散乱している。途中列が二つに分かれる。何だろうと思っていると人の形をしたヒビ割れだ。皆脱帽又は敬礼をして通過した。穆稜（ムーロン）、伊林を過ぎ、卜城子では一日休息で二泊、馬橋河、大嶺、綏西と過ぎ、十九日綏陽を通過して山の中の鉄道信号所付近で野営、国民性の違いか朝は八時から夜は九、十時ごろ、暗くなるまで行軍させるが、昼休みは二時間くらいある。二十日は国境の街綏芬河を通過、満ソ国境線を越えた。途中の草原で野営して二十一日夜遅くクロデコー

ウォの町を過ぎ郊外の草原に野営した。二十三日はパンが支給され有蓋貨車に乗せられて出発、あと二、三日でウラジオストックと一同元気を増した。時々止まる駅でソ連人にウラジオはどちらかと指差せば、進行方向を指すので喜んでいると、三日目になって列車の後方を指す。初めてダマされたことに気づき一同ガックリ。夕方山間の小駅で下車を命ぜられた。紅葉も色あせたこの小駅が、以来三年間お世話？になるとは何たる因縁だろうか。昭和二十年九月二十七日、沿海州スーチャン地区チグロワヤ村にて、苦難の生活が始まったのである。

伐採作業始まる

我々は人員点呼後、ソ連兵の誘導で一キロくらい歩いた所の小部落側の雑木林で野営した。翌日、旧森林鉄道のレール沿いに五キロくらい山の中に雑木林を踏み分けながら前進した。その晩は携行の天幕で野営したが寒さが厳しく眠れなかった。

翌日、幕舎の中央に溝を掘り、煙道を作り、入口で薪をたくことにした。幕舎にも木の葉や草を覆いにし

た結果、幕舎内はいくらか暖かくなった。まず、兵舎造りを急がねば雪が近い。二人挽きの鋸と斧とが渡され、材木伐採をする者や半土中家屋のため山の斜面を利用して穴を掘るなど大忙し。各中隊競争で兵舎造りが始まった。壁も屋根も丸太だ。屋根はその上にモミの葉を敷きつめ土を盛って出来上がり。各分隊の上は煙出しの小屋根がつく。

中は二段式寝台、これまた丸太を並べるだけ、その上にウラジロのような葉を敷き、二人で一枚毛布を敷き、一枚は着る。中央通路には石と土でペチカを作る。各分隊二階の部分に両側に小ガラスの窓を作る。わずかな光が入ってきた。夜の採光は針金で網を造って、肥え松を小さくして当番が燃やした。幸い松の根は豊富だった。翌年の雪解け時期になると、天井から泥水が落ちてきた。携行天幕のない者は木の皮をはいできて裏張りしたがうまくいかない。そのうち、松、モミなどを五十センチに輪切り、斧で割って薄板（ドランキ）を作って張っていた。釘はないので鉄条網を間引きして五センチくらいに切断し、各人何本とノルマ。

作業から帰ってからレールを台に石や斧の後ろで叩き伸ばして代用釘を作った。

さて兵舎建設にメドが付いたころ、作業班を編成して伐採が始まった。しかもノルマが一人一・七立方メートルという。我々、拉古編成十二大隊（長・小林大尉）は五六六労働大隊として、第五の谷（旧地区）に二十二年六月まで居住して、主に白樺、リーバ、泥柳などを長さ二メートルの薪材伐採をさせられた。時には六メートル、八メートルの電柱材（松、樅、栂など）も伐採した。

我々と同時に当駅に降りた十一大隊（長・梅田大尉）も第五の谷の新地区で伐採していたが、後では第一の谷に移動していた。また、十八大隊（長・松本大尉）は駅付近に展開して、薪の貨車搭載や集材する自動車隊の整備などをしていたが、後には自動車整備員のほかは炭坑の労働に行ったと聞いた。貨車搭載の労働は十一大隊の一部がやっていたようだった。我々も二十二年七月から隣の第二の谷に新兵学校倉庫を建てて移動したが、作業は第二、第五の谷を担当して伐採、集

材、自動車搭載などをやった。

ノルマは当初一人二・七立方メートル、二人で（鋸が二人挽き）五・五立方メートルだったが、二十一年夏ごろから一人五立方メートル、二人で十立方メートルとなった。つまり二人で命ぜられた伐採地区（後述）で禁止木を除く白樺の木材を長さ二メートルに切断して、高さ一メートル十センチ（十センチは積込み空間一割として）長さ五メートルに積みこんで、翌日ワインレスホース（軍用営林署？）からナチャリニックが来て作業結果を検査して証明書を書いていた。五センチ以下の枝は全部燃やして公園のように清掃させた（これもノルマのうちとか）。

朝七時点呼後入山、夕方までにノルマを終えた者、六時を帰宅時間に帰っていた。夏はまあまあだが、冬は苦勞が多かった。前日の検査済み印として主な薪の両面に炭で×印を付けて盗用せぬようにしていた。自動車積込みで山を崩しに来るのは二、三日後だから、そのときは切り口にヒビが入っているので盗用できず、結局真面目に働かざるを得なかった。特に二十一年春

草の芽が出るまでは食糧事情が悪かったので、その間が一番みんな栄養失調になって、力が出ないし、「ダワイ・ダワイ」の声は今でも忘れられないほどうるめしいものであった。二十センチ径の二メートルの薪を二人でやっと持ち上げて担いで行くのに力なく倒れてばかりいた。本当に情けないが栄養失調になって働いた者でなければわからないと思う。

不達成のため中隊長が「棺桶宮倉」に入れられた。隊長の話では五十センチ四方の校倉オリの中に立たされたので、座ることもできず、足を折るにしても膝が少し曲がるだけだ。二回目から工夫して小さな枝木を服に隠して角に尻の高さにはめ込むと少しはよかったとのこと、後日談、内地だったら前科何犯の大前科者だがと。

それで我々も何とかノルマ達成のための悪知恵を考えては見ると、思うようにいかぬ。帰還する前ごろ、先の谷に残留薪が二十立方メートル帳簿残があるのに実測は十三立方メートルしかない。お前たちが自家用薪に盗んだんだ、その分、別途伐採して補充しな

いとダモイできないと言う。我々としても、「ダモイ」の予告があったので、彼らがノルマを重複加重命令すると思ひ、「我々に罪を強要しているが、一般ソ連人が持つて行くのも見るし、時には車ごと運転手が彼女の家に下ろしたことも見たし、モスクワの裁判所に上告するので手続を教えてください」といって頑張っていたが、その後ダモイしたので後はどうなったことや。そのようにしてノルマの重複的作業の強要があったのではないかと思う。ノルマの規定書を見せると言うと、ウオロシロフの委員会にあるとか言っていたが、信用できなかった。ノルマ達成のため軽作業しかできない者まで出勤させようとする。軍医が作業は無理と言っても、その分のノルマは他の元気な者が負担せよといつて、いつも、点呼のとき作業人員でもめていた。

ある日、昨日は八名の軽作業者が今日は五名増えて十三名になったといえ、ソ連中尉が両手を出して口で十一、十二と数えたのには驚いた。総じて掛け算、割り算がスムーズにできる者は少なかった。健康管理については、頼りになるのは自分で、ビタミンCは草

などから採り、鳥目予防には松葉を温湯にひたして飲んだ。日本の軍医が毎日ソ連と争って病人を管理しておられた。時には五種混合液をサイダー瓶に入れてきて注射していた。朝の点呼は腹が立ち、夕方は日曜以外は作業地の違いでマチマチだった。

入ソして半年くらい入浴しなかったので、シラミが増えて苦労した。夜ベチカの炭火を手前に出して下着をひろげると、パチパチとはじける音が楽しみになった。しかし虫の子は落ちないので板の上で拇指でつぶしていた。これで良いのは一晩だけで、また翌日はかゆくなるのには不思議なくらいだった。

衣服は旧日本軍騎兵用の防寒ズボンが渡されていたが、冬は焚き火が多いので飛び火で穴があく。そのうち裏返しにするが白地のためすぐ汚れる。やぶれた穴から綿がさがって乞食でも着てないような姿になる。親が見たら泣くだらうなどと話していた。そこでソ連人に申し込んで、寒くてノルマ達成に影響する、と言うと、しばらくしてから満人用の黒縮入ズボンが渡された。翌日の朝礼で着用しているのは少数だけ。作業か

ら帰って来ると舎内検査があって引き上げられている。

ソ連流に言えば、お前たちが作業ができないと言うから委員会に申し込んで支給したのに着用しないのは、まだ前のが着れると思つて引き上げたと言う。一理はある。そこで我々は身の丈など修正してから着るつもりだったと言つて返してもらつた。翌朝は一応新品着用でケリが着いたが、日本人はとかく良い物はしまつて置き、特に山仕事には古い物で仕事するくせがある。

食物は特に一番苦労した。入ソ当初は輸送の關係と云つて二日分の高梁を五日に食い延ばされた。二人で一回に飯盒一杯のオモユ同然の汁を飯盒のフタによつて交互に飲む。高粱の粒も木の匙でかき混ぜると、時々お目にかかる状態である。それから皆、目が引つ込み、足がだるくて歩くのに苦労しはじめた。

そのうち雪解けとなつてハコベの芽などの草の芽を雑炊の中に混ぜて食うようになつて少しは元氣が出てきた。どうも輸送途中にソ連兵がピンはねしているとの噂もあり、黒パンにしても重さだから水分を多くして支給するというので、我々はパンより饅頭がよいか

ら、こちらで作るので現物の粉を支給してもらふことにした。それで朝夕はそれに支給の魚や野菜類を混ぜて雑炊にした。昼は饅頭を作つて配つた。草の芽は雑炊に混ぜて量を増し、饅頭にはヨモギを石でつぶして混ぜて大きくして食べた。そのうち茸やわらびなど山菜が豊富にあり、栄養よりまず満腹感が優先された。思えば我々を救つてくれたクサには感謝している。中には毒草、毒茸を食べて犠牲になつた者もいる。「ヤポンスキー、馬と同じ」と罵られながらも、ビタミン補給と云つて高級野菜のつもりで食う。

また川では夏はヤマメ、ニジマスなども捕れたし、山には兎、まむし、蛇類、キツツキなどの鳥類はソ連兵をおだてて撃つてもらつた。秋には松の実最高の果物、木の芽出しごろは白樺の幹より出る薄甘い汁のお陰で、空の水筒を持つて採つた。二十二年の夏ごろから草のお陰で体力もいくらか回復してきたし、仕事も要領がわかつてきて、時々休日があるようになった。そんな時には演芸会などして楽しんだ。

碁、将棋なども手作りで楽しんでたようだ。

民主運動は日本新聞の渡辺という人が来てから話題となったが、郷土部隊で表向きは青年行動隊も編成しないと言われ、ダモイが遅れるとの心配から編成することにした。ある日、民主化が遅れていると指摘されたので、ソ連側を資本家に見立てて、労働運動をしてはいかかかとの間に、それは適当ではない、むしろ将校を相手にせよと言われてもピンとこなかった。入口の飾り言葉はよいが先の見えない共産主義に心から賛成できなかった。

自己体験を通じて、乗り越えた具体的な核心は「友愛」であった。郷土部隊で、移動がなかったことも幸いして、三年間に彼の地での犠牲者は二十三名である。帰ってから他の収容所に比べて少ないのは「友愛」のお陰と信じている。

我々は二十三年九月二十七日、奇しくも三年前到着した日の午後「ダモイ」の知らせを受け、山に作業中の隊員に叫んで歩く。五時ごろバタバタして駅に行つたが汽車が来ていない。こんなことなら夕食をしてくれればよかった。忘れ物も近くなら取りに行くが六キロ

もの山中では、いつ汽車が来るかわからない。結局一晩じゅう駅付近で夜を明かし、朝になって薪積み用の無蓋貨車が来た。我々は、「帰れるのであれば我慢して乗る」と言うが、機関士は人は積めないと言う。ソ連同士ですったもんだで話し合った結果、一両目をあけて二両目から乗ることで決着した。七百名の者が乗り込んで正午ごろ出発、途中スーチャンにしばらく停車して夕方ナホトカ駅に着いた。

途中の眺めはよいが寒さも感じる。さあ下車かと思えば、警戒兵が降りるなど言う。港のあるカーメンシキ駅まで行くのだが、機関士はナホトカ止まりだと言うし、何か前日からその辺の連絡が不十分なのに驚いたものだ。暗くなってからカーメンシキに着き、収容所に入る。ソ連兵に別れを告げて一夜をすごす。翌日は砂浜で私物検査、引き続き入浴して別棟へ、そこで第六十一梯団として明日は「信洋丸」に乗り込むと言われた。三十日午後から港の方へ行進して夕方になって乗り込み、しばらくして船は動き出した。

十月二日、港の人口の民家に日の丸が掲げてあるの

を見て、やっと日本に帰って来たと安心した。上陸手続などを経て十月六日、やっと我が家に落着いた。

思い出の記

岩手県 川上 仁

(旧姓 出羽)

昭和二十年ころ、私は衛生兵としてチチハル陸軍病院所属の兵であった。

そのころの日本軍の戦況は、日に日に悪くなり、傷病兵の数は夥しく、チチハルまでの輸送が困難であり、座して待つよりはと、緊急の処置としてハルビン陸軍病院へ一部の兵隊を転出させることになり、軍用列車を編成し出発することになったのである。

そのころ満州国内には、不穏の兆しありとの風説もあり、軍部でも何らかの対策を立て万全を期さなければならなくなり、まず列車運行に危害を及ぼすやも、と疑われる満人の襲撃を防ぐための決死隊を編成する必要があり、人選にかかり、発表することとなったの

である。

やがて発表となり、読み上げの氏名の中に私の名前があったのに驚いた。鉄砲の取扱も知らない者になんたることと思っても「できません」とは言えませんでした。

ところが、「オイ、出羽二等兵、その役を俺にやらせてくれ」と言う兵が私の前に立っていたのだ。「上等兵殿、どうしてですか」と聞くと、こういうことであつた。

お前のような二等兵に決死隊となられては、〇〇上等兵の面子が立たないからだというのが理由のようであつた。

「決定されたものを勝手に変えたら自分が罰せられませんか」と念のため確かめてみると、「大丈夫だ、上官には了解を得ているから」とのことだ、「よろしくお願いします」と敬礼して別れ助かったが、悪いことをしたと複雑な思いであつた。

それから一路ハルビンへと列車が進む。列車の中の緊張が長い間続いたのだったが、幸い何事もなくハル